

丹波 桑田郡

山本

國府に續きたる名葉にて、奇香異味國分舞留美を競然といへども此葉甚辛烈故、人は是を好ず、近來弱和を吸所似なり、上を留葉と云、至てき中を舞葉と云、下を薄舞と云、上土地に産すれば、葉に力なくとも薫有、畠地へ産するを上品として俗に舞と云、田地へ産するを下品にして服部と云、下品なるは火を點するに忽滅、都て我國は何地にても田へ産る烟草は皆下品也、稻を耕すに聊障なし、舞留上中下の葉ともに五年七年の古葉を賞美す、殊に止葉は數年圍置しを上品とす、氣味辛といへども香氣強、口中清潔にして水を嗽がごとし、

薰○橘考るに、中葉未熟せずして枯萎する者味薄けれども芬郁也、これを舞と云、葉の表横莖

ゆ中葉下力なきを婆娑と云、俗には、アとも云、舞といふ名あるによりて、姫の老たる意なるべし、○中略

烟草は味辛く氣温にして毒ありと、諸書に見ゆれども、一體異國の烟草は、葉に力ありて辛烈故に毒多し、東洋の烟草は人命を助るほどの能あるが故に、又毒もあるべし、我邦のたばこは、能もなく毒もなし、明和安永の頃までは、辛を上品とせしが、近來作方肥を撰み、和柔に乾晒す、中にも館は葉に力ありて、和らかなる名葉なれば、日本の中にも、江戸の烟草は名産なり、都て關西の品はきつく、關東は和らかなり、蠻國にても東洋は勝れて、西洋は劣といふ、唐土にても閩の産は上品とす、燕の産は中品、浙江石門は下品なりといふ、○中略

〔烟草百首〕烟草至て好る人旅行の時用る、五町烟草の取合は、野州馬頭山の最上の油脂の深きに、秩父薄邊の脂つよき葉と等分に合せ、刻道中は度々つき替ことを厭へば、右の烟草に火を點る時はきゆることなく、きせるに息をいれざれども、五町が間滅ざるを奇とす、前にもいへること